

六朝建康城の研究 —— 発掘と復原⁽¹⁾

A New Thought on Excavation and Restoration of Jiankang City in Six Dynasties Period

張 学鋒 (小尾 孝夫 訳)

Zhang, Xuefeng: OBI, Takao (translated)

キーワード：六朝、建康、復原、都城史

Key words: The Six Dynasties, Jiankang, Restoration, History of Capital Cities

六朝建康城遺跡の考古発掘作業はすでに前後8年(2008年当時)続いており、発見された考古資料のすべてが発表された訳ではないが、その一部分の資料がメディアおよび発掘担当者の近著にすでに公開されている。これらの資料は、発見されたその氷山の一角にすぎないが、建康城の復原研究におけるその価値についてはすでに十分に示されてきている。筆者はかつて考古資料が全面的に公表された後に建康城遺跡研究を完成するための準備として、20世紀以後の建康城研究の学説史について基礎的な整理をおこなったことがある。そこでは、その成果を確認するとともに問題の所在を指摘し、併せて建康城復原のための新構想を提示して、関連する資料が公表された後に建康城址の研究がより一層進展することを期待した。本稿は、その旧稿⁽²⁾を基礎とし、筆者がそれ以降に得たいくらかの知見を増補したものである。

一 文献史料による六朝建康城の復原研究

西暦589年陳が滅ぼされた後、六朝建康城は破壊されて耕地にされ、唐宋時期にはすでにその遺跡はほとんど尋ねるべくもない状態であった。そのうえ現在の南京市街区は幾重にも重なった歴代の都城遺跡の真上にあり、考古調査のための活動に相当の困難をもたらしている。しかし、3～6世紀の南中国の政治・文化の中心たる六朝建康城は、重大な歴史的・学術的意義を有していたから、歴代の学者から高い関心を集め、その所在の探求と研究は途絶えることなく続けられてきた。

六朝建康城の構造と規模、配置を研究する際、関係する正史中に残された断片的な史料を除けば、唐人許嵩の撰述した『建康実録』二十巻が現在のところ目にすることができる最も早期かつ最も情報量の豊富な史料である。本書は、本文のほかに注記を加える形式をとって、ひろく『金陵記』、『寺記』等の六朝典籍を引き、六朝建康都城の宮観寺院について比較的詳細な注釈をつけており、この

部分の内容は六朝都城建康を研究する際の最も重要な史料である。ただ、許嵩の時代に参照された地点は現在ではほとんど失われているため、『建康実録』の記述を利用して六朝建康城を的確に復原することは今やほとんど不可能である。宋元以後、地方志の編纂が盛んになり、南宋・張敦頤の『六朝事迹編類』、周応合の『景定建康志』、元代張鉉の『至正金陵新志』等、民国の『首都志』に至るまで、一部の内容は撰者の考証によるものとはいえ、その主要部分はみな正史と『建康実録』の内容を超えるものではなく、また時代もすでに相当たっていることもあり、その具体的な古跡に対する推定もまた誤りを免れ難い。

明清時代の学者の建康城に対する研究と叙述もまた注目に値する。明人陳沂『金陵古今図考』、王士性『広志繹』、清人顧炎武『歴代宅京記』・『肇域志』、顧祖禹『読史方輿紀要』、陳文述『秣陵集』、甘熙『白下瑣言』等は、みな一定の参考価値がある。ただ、彼らの著述は、その性格から言えばひとしく個人の学術研究成果に属し、唐宋人の編纂史料とはその性格を異にしており、使用する際は真偽を見分ける考証をおこなう必要がある。

近代人の六朝建康城の研究は、1935年の岡崎文夫「六代帝邑考略」⁽³⁾と1936年の朱偁『金陵古迹図考』⁽⁴⁾に始まる。とりわけ朱偁のそれは、文献考証を踏まえ初めて古籍中のものとは別に六朝建康城の平面配置図を作製し、以後半世紀以上の間、学界に深刻な影響を及ぼしてきた。20世紀50年代以降、六朝建康城を詳細に検討した著述は40篇余りにのぼり、その中であって建康城の復原にまで議論が及ぶものもまた20篇ほどにある。六朝建康城の全体の復原研究の中であっては、意見の相違が

比較的大きいため、以下では、基本的に時代の前後に従って、主要な学術観点と問題点を紹介し論評する。

1. 朱偁『金陵古迹図考』

朱偁『金陵古迹図考』は、「建康遺跡は、現在すでに考証しようもないが、ただ鶏鳴寺背後に残る古城牆の一部分のみは、とくに六朝時代の遺物である。故に北界を除く東西南の三面の所在は、もはや確定することができない。ただ古籍によれば、宣陽門は秦淮より五里の距離があり、また都城は正方形であったと仮定すると、周囲は二十里十九歩であったから、一辺はだいたい五里であったと推測される。そうであるならば、古の長樂渡（現鎮淮橋東北、古の朱雀航の所在地）より北へ五里がまさに建康の南界となり、十里が建康の北界であったはずである。宣陽門はまさに現土街口一帯にあたり、その四至もまたこれを基準にすれば推定するのは難しくない。」と述べている⁽⁵⁾。朱偁の作製した孫呉・東晋・宋・齊・梁・陳六代の建康城図は、六朝鶏籠山（現北極閣）・潮溝・運漕を網羅しているだけでなく、五台山の一部分までも包括している。（図1）

朱偁が復原した建康城図の出発点は、現在の北極閣鶏鳴寺後方の一部分の古城牆を六朝建康城の北牆と認定し、現中華門北側の鎮淮橋東北にある長樂渡を都城南端の朱雀航と見なしたことにあり、しかも建康城が基本的に正方形であると想定したうえで、都城の正門宣陽門が土街口（現新街口東の中山東路の洪武路入り口）に存在したと推定したのである。朱偁がこの推定を下した根拠は少なくとも二つある。一つは今の鶏鳴寺背後の一部分の古

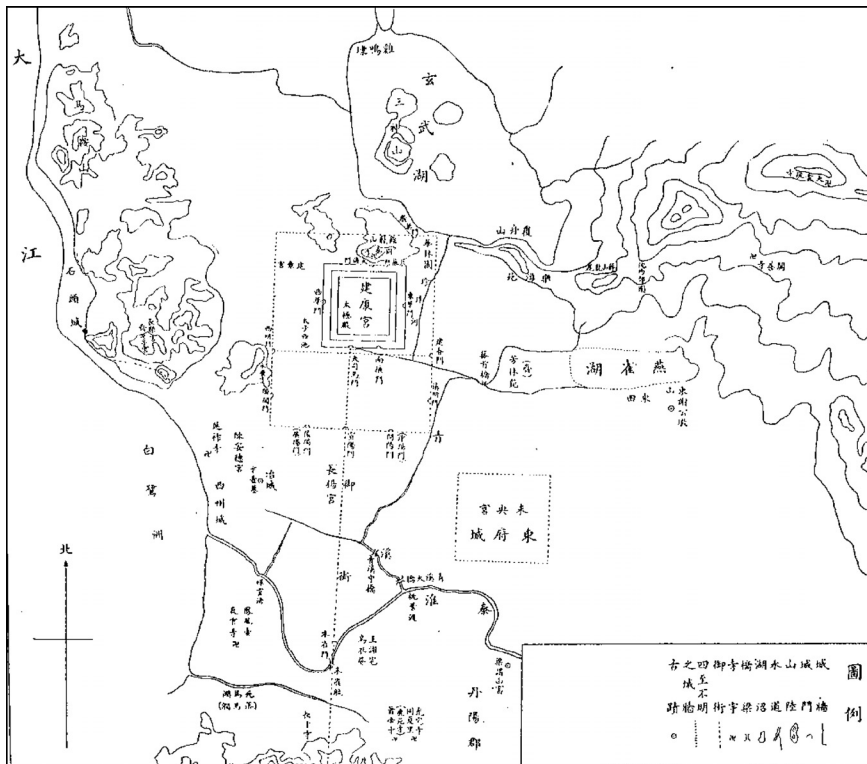


図1 朱僂復原図

城牆を建康都城の北牆遺跡と考え、城南の内秦淮河の長樂渡を朱雀航と見なしている点であり、今一つは鷄鳴寺を梁代の同泰寺に比定している点である。鷄鳴寺の背後の一部分の古城牆を建康都城の北牆と見なすのは、誤った伝承であり、それは最も早く清代南京の学者・甘熙の『白下瑣言』に見える⁽⁶⁾。また、長樂渡を朱雀航と見なすのも文献と符合しない。しかも鷄鳴寺背後の一部分の古城牆は六朝と関係がなく、明代城牆の中でも廃棄された一部分であることはすでに証明されている⁽⁷⁾。したがって復原された建康城の位置は、全体的に『秣陵集』等の古籍中の記載と合致しないところが多い。

蔣贊初の『南京史話』は朱僂の上述の観点を継承し、書中に附された「南京歴代都城相

互関係図」では六朝建康城の位置は朱僂の作製したものと全く同じである⁽⁸⁾。研究の進展にともなって、その後蔣贊初はしばしば都城の北界が現北京東路の南のラインであると言及するようになった⁽⁹⁾。

2. 羅宗真『六朝考古』

羅宗真はその著書『六朝考古』で、朱僂『金陵古述図考』の現鷄鳴寺後方の一部分の古城牆を「台城」と呼ぶ説を訂正した。羅は以下のように考えている。魏晋以後、宮城もまた台城と称するようになる。それは都城の内にあり、敷地はとても小さい。建康宮城は孫呉の宮城を基礎として建造され、その周囲はわずかに八里にすぎない。『建康実録』、『至正金陵新志』、『宮苑記』は、みな台城は建康宮

城であって建康都城ではないことを確認している。また、南斉以前、城牆と城門は土牆と竹垣によって建築されていた。それに対し、鶏鳴寺の後ろの六朝古城は磚を積み上げて築かれているから、その建造年代は南斉の後ということになってしまう。『建康実録』卷十七には、大通元年、「(梁武)帝同泰寺を創る、寺宮の後に在り、別に一門を開き、大通門と名づく、寺の南門に對す。」とあり、また『輿地志』には、「同泰寺台城と路を隔てる」と見え、建康宮城が現鶏鳴寺の南にあり、宮城の北門が寺の南門とはるかに向かい合っていたことをはっきりと証明している。これは台城の北界が現鶏鳴寺の南、すなわち現東南大学の北壁一帯にあったことを裏付けている。よって我々が見ている鶏鳴寺北から北極閣に至る一部分の城牆は、当時の都城の北界であって、台城ではないのである、と。この認識に立ち羅が復原した六朝都城の四至は、西はほぼ現中山路西側、北は北極閣(六朝鶏籠山)下、南は中山東路南側、東は太平北路東側にあり、当時の宮城については、南面はだいたい現在の珠江路の中ほど、西は進香河に相当し、東は珍珠河に至り、北は北極閣下鶏鳴寺前一帯に達している⁽¹⁰⁾。

羅宗真の観点は朱偁と基本的に同様であるが、ただ鶏鳴寺背後の一部分の古城牆を建康都城の北界とし、台城の北界ではないと推定した。

3. 郭黎安『六朝建康』

郭黎安は次のように考えている。孫吳建業城の範囲に関しては、考古調査によって現北極閣鶏鳴寺後方の西家大塘(昔は栖玄塘と言い、もとは玄武湖の一部分であった)沿いに

一部古城牆があり、その外を明の磚が覆っていて、内に六朝小磚が混ざっていることが分かった、俗に台城と言う。また、今の小九華山(六朝覆舟山)から北極閣に至るまでの間の明代城牆中にもやはり多くの六朝小磚が入り交じっていた。おそらくこれは明代の築城時に、六朝時代から残っていた残牆や磚石を利用したのであろう。これにより孫吳建業城の北牆が鶏籠・覆舟二山に依って築かれたことを断定し得る。『広志釋』と『秣陵集』は「城覆舟山の前に据る」と言っているが、決してでたらめではない。建業城の東界はまさに青溪に至って、青溪を濠塹とした。西界は決して今日の鼓楼岡を越えることはない。東・西・北の三辺がすでに確定すれば、城周二十里十九歩に基づいてその南界を特定することができ、おおよそ現新街口南の淮海路一帯に到達する。東晋南朝建康城の範囲は、東吳の旧制に基づく。建康宮の位置に関しては、近

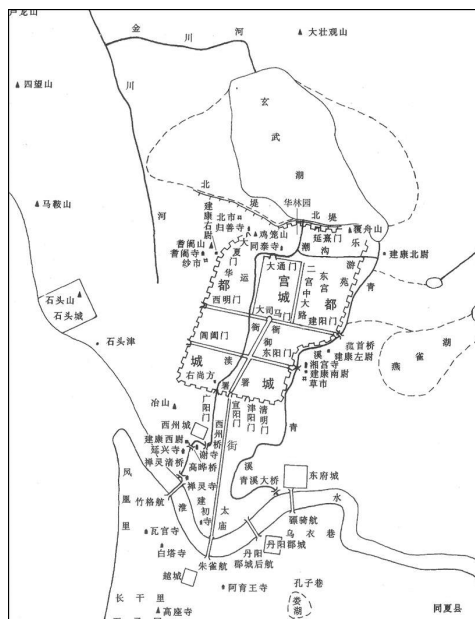


図2 郭黎安復原図

代人の朱偁が現東南大学を該地であると推断した。朱偁の説は誤ってはいないが、ただ西界が現中山路に達するというのは西に偏り過ぎていているように思う、と⁽¹¹⁾。(図2)

郭黎安の意見は、基本的には朱偁の説を支持し、それに小九華山から北極閣までの間の明代城牆中に入り混じる小磚を六朝の遺物であるという物的証拠を加えた。しかし、小磚が六朝の遺物であるという説は根拠に乏しいし、郭が作製した六朝都城位置図は不規則な形をしており、朱偁の復原図とは差異がある。宮城南門大司馬門から都城南門宣陽門をへて朱雀航に到る御道を文献中の七里と合わせるために、その御道を曲げざるを得なかったのである。この問題はその宮城の位置の推定と関係がある。

4. 秋山日出雄「南朝都城『建康』の復原序説」『南京の古都『建康』』

日本の学者・秋山日出雄は、20世紀80年代に「南朝都城『建康』の復原序説」と「南京の古都『建康』」の二篇を続けざまに公表した⁽¹²⁾。趣旨は建康の都市構造が日本の古代宮城の祖型の一つであることを説明することにある。その主だった観点を整理すれば以下の如くである。(1)孫呉時期の建業宮城は、朱偁の観点を受け入れ、現東南大学一帯にあり、都城は南唐金陵城の北半分に相当する、そして、南部は現建業路南の水路に沿い、東・西・北の三面は南唐金陵郭城の位置と一致すると推定した。(2)東晋の都城は、孫呉都城を基礎に拡大し、南の方は、秦淮河の南北兩岸を包含した。これは洛陽城の所謂「九六城」の形態を重視した表れである。(3)劉宋時期、都城はさらに東・南・北の三面向かって拡大し、東

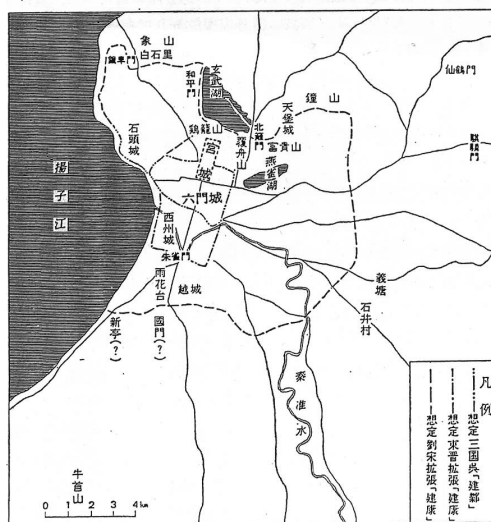


図3 秋山日出雄復原図

は鍾山の東麓に到達し、北は明の城牆と重なる位置に到り、西は大江と接し、南は雨花台を越えた。(図3)

所謂「九六城」とは、北魏洛陽宮城南側の中央官庁の置かれた区域、あるいは隋唐長安城・洛陽城の皇城である。秋山は南京の自然地理的要素を無視し、過剰に洛陽・長安の制度をよりどころとして建康城を復原しており、そのため秦淮河兩岸の雑多な居民商業地域をも「九六城」の範囲の中に繰り入れ、東晋都城と南唐都城とを混同し、劉宋都城の範囲を無限に拡大させるというおかしい結果をもたらすことになったのである。その原因は建康城に関する史料を熟知していない点にある。

5. 中村圭爾「建康の『都城』について」

日本の学者・中村圭爾は、次のように考えている。建康都城の北牆是北京東路のラインにあり、北牆の東端は九華山の南麓附近にある。また、西端は北極閣南麓附近から進香河路と洪武北路の交点附近までのライン、東牆

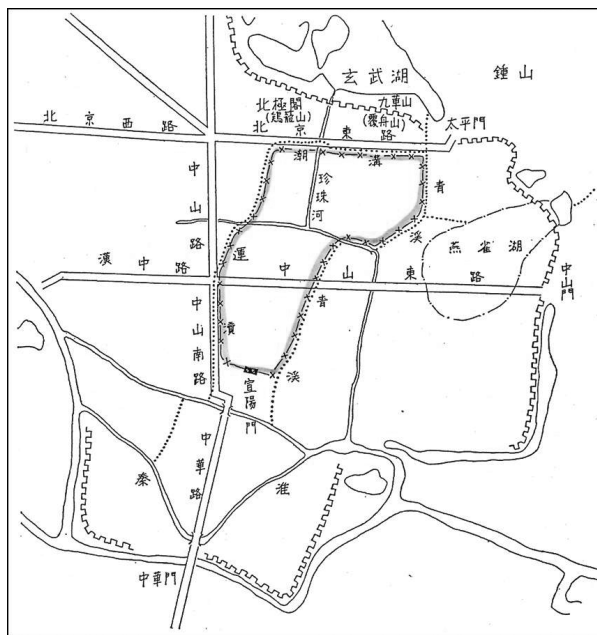


図4 中村圭爾復原図

は小營路からうねうねと延び太平橋附近をよぎって利濟巷附近に至る、南牆は鎮淮橋北五里にあって、すなわち火瓦巷・戸部街と三十四標附近に、正門宣陽門は戸部街の火瓦巷入り口附近にある。また都城は想像されるようなきちんと整った形ではなく、とても不規則なそれであって、とくに青溪に沿って建つ東牆は、青溪に九曲有りと言うように、その城牆もまたおそらく屈曲して延びていたと考えられる、と⁽¹³⁾。(図4)

中村の論文での主要な考察対象は建康都城であり、都城の北界を考証して九華山南麓の北京東路のラインと訂正し、都城の西界と東界についても新たな見解を提示した。都城の形状を不規則なものとする点は、郭黎安の意見とよく似ている。

6. 郭湖生「六朝建康」

郭湖生は、1993年以降、「六朝建康」等、

一連の建康城について考証した著述を発表している⁽¹⁴⁾。建康城の位置について触れた際、郭は、鶏鳴寺北辺の一部分の古城牆は、南北朝時期の遺跡分布の現状から見て、これを六朝遺跡と見なすことは難しいと指摘した。また、都城の北壁と宮城北壁とが重なり合っていたと考えた。作製された「六朝建康形勢図」では、都城の形状を正方形とし、北は潮溝を境界とし、鶏籠山と覆舟山から遠く離れている。西は運瀆を境とし、東は青溪から一定の距離を設けている。(図5)

郭湖生は、建康宮城の位置を現大行宮一带にあったと推定しており、この意見は朱僕以来の見方を根本から改めた。この後の研究は多くこの見解に傾くことになる⁽¹⁵⁾。この見解の部分的な観点についても

近年来の考古発掘によって徐々に実証されてきているが、その「六朝建康形勢図」は、南京市区図に照らして作製していないため、運

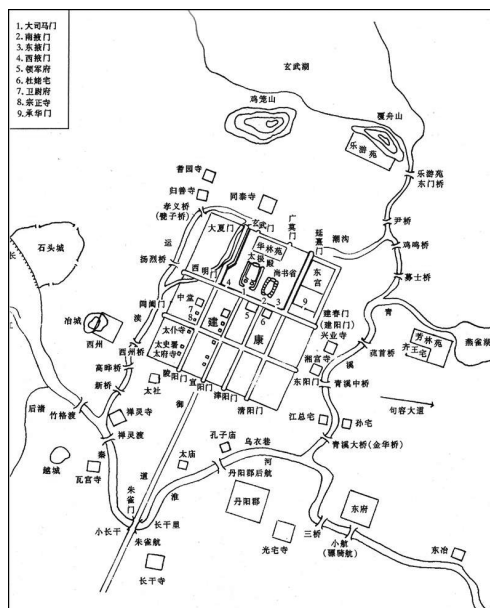


図5 郭湖生復原図

瀆・青溪の位置は依然として問題があるように思う。とりわけ南部における瀆・青溪の間の距離を長くとりすぎている。そのため、作製された都城復原図は、依然として正方形を呈している。

7. 馬伯倫主編『南京建置志』

馬伯倫・劉曉梵主編の『南京建置志』は、六朝建康の都城・宮城の範囲について以下のような推定をしている。都城は現在の南京城中央の東寄りにあり、その中心部の位置はだいたい現太平北路と珠江路・長江路それぞれの交点の間の一帯に存した。東界は青溪の西岸により、青溪を濠とした。北は現太平門より始まり、鍾山西麓に接近し、青溪に沿って南下して、東北から西南に向かって、現太平南路東側の文昌巷南附近に至る。南界は、現淮海路からやや南のラインにあり、東は太平南路東側の紅花地・大楊村附近から始まり、西は現中山南路附近に至る。西界は、北は鶏籠山南麓の西寄り、だいたい現進香河路・洪武北路のラインから始まり、西に傾いて南に延び、中山南路の淮海路入り口に至り、都城の南界と会す。北界は、覆舟山・鶏籠山の南、現北京東路よりさらに南のラインにある。東は太平門内より始まり、西は進香河路に至る。宮城は、すなわち都城の中心から北部寄りにあり、おおよそ現大行宮の民国総統府一帯に存した、と⁽¹⁶⁾。(図6)

宮城が現大行宮一帯に位置したというこの意見は、郭湖生の見方と一致する。ただし、郭湖生が復原した平面を正方形とする都城と比較すると、『南京建置志』は、さらに青溪・瀆の実際の流れの向きと両水の間の距離を考慮している。そのため作製された復原位置

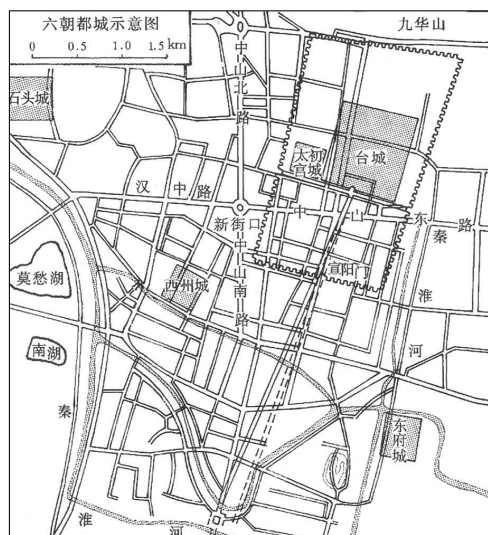


図6 『南京建置志』復原図

図は、東西が狭く南北が長い長方形に近い形を呈している。ここで問題なのは、『南京建置志』が推定する建康城が現珠江路南側の水路の南北にまたがっている点である。もしこの水路が六朝潮溝遺跡だとすると、宮城が潮溝にまたがるというこの仮説は文献の記載と合致しないことになる。都城西界北部分の推定では、依然として朱偰の学説（進香河路を瀆の旧河道と見なす）の影響を受けていることが分かる。

8. 李蔚然「六朝建康発展概述」

李蔚然が1998年に著述した「六朝建康発展概述」は、建康都城の四至を推測して、以下のように考える。都城の東界は青溪と燕雀湖を境とし、北部は覆舟・鶏籠の二山を境界とする。西界は、現北京西路の南京大学西側より南に向かって現王府大街三茅宮一帯に到達し、南界はおおよそ現羊皮巷一帯にあたる、と⁽¹⁷⁾。

李蔚然論文の重点は、建康城址の研究には

ない。だから都城の四至についての描写は、郭湖生・馬伯倫等の成果を参考することもないければ、文献の考証と考古遺跡の分布を踏まえて作り上げたものでもなく、その推測した範囲は、ただのおおざっぱな空間概念にすぎない。

9. 賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』

賀雲翱がその著書『六朝瓦当与六朝都城』で作製した六朝歴代都城の復原図は、全体的に『南京建置志』のそれと非常に近似しているが、ただ青溪の流れる方向が少し異なっており、現民国總統府の外壁の東側にある東箭道を青溪の旧河道の一部と見なしている⁽¹⁸⁾。(図7) 東箭道を青溪の旧河道の一部と見なすこの見解は、上述の郭黎安や中村圭爾のそれと一致する。こうした見方は、或いは1930年代の朱偁の『金陵古迹图考』「金陵古水道图」と部分的な地質ボーリング探査資料の影響を受けたのかもしれない。しかし、近年来民国總統府東側のもと漢府街長距離バスターミナル工事現場で見つかった城牆・城



図7 賀雲翱復原図

濠の遺跡、そして總統府東南方向の江蘇美術館新館建設工事現場で発見された六朝時代の磚で舗装された道路から、現東箭道が城牆の内側にあつて青溪の旧河道と見なし得ないことは明らかである⁽¹⁹⁾。したがって、郭黎安・中村圭爾・賀雲翱三氏の復原図中のこの部分についても修正される必要があるのである。

10. 廬海鳴『六朝都城』

廬海鳴は著書の中で次のように述べている。都城が正方形で、全体がわずかに東北から西南方向に傾斜していると仮定すると、北界は北京東路の南あるいはさらに南のラインに、南界はおおよそ戸部街・常府街のラインにあり、西界はだいたい進香河路・廊後街・破布営のラインに存し、東界は龍蟠路と黄埔路の間のラインに位置する。宮城は現大行宮一帯にあつた、と⁽²⁰⁾。(図8)

廬海鳴の『六朝都城』は、初めて部分的に

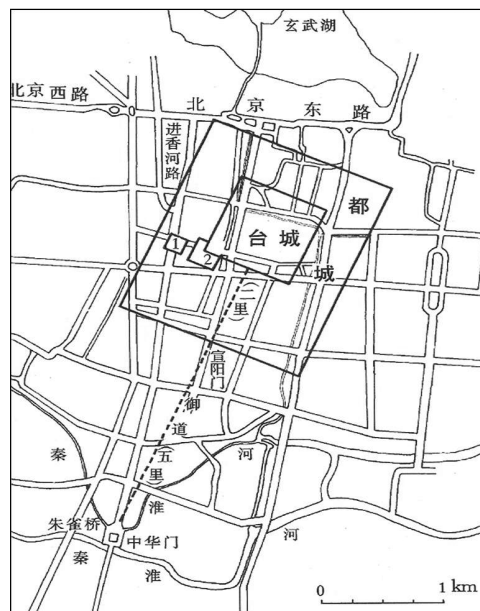


図8 廬海鳴復原図

考古発掘成果を利用しており、その宮城の位置の推定はおおよそ信用することができる。しかし、推定した都城東界に関しては、青溪をはるかに越え、現黄浦路一帯に到達しており、青溪を建康都城東側の防衛線とする文献記載と符合しない。黄浦路一帯はおそらく六朝期の燕雀湖の中に位置すると思われる。このようになってしまった原因を考えてみると、著者がまず建康都城を正方形と仮定したことを挙げられる。建康都城を正方形と仮定する方法だと、朱傑や郭湖生もまたそうなのであるが、南京の都市独特の自然地理的要素を軽視してしまうことになるのである。

11. 外村中「六朝建康都城宮城攷」

日本の学者・外村中は、歴代文献史料に対する緻密な考証を基に、建康都城と宮城の位置を比定した。上述の諸氏の研究と比べると、外村は建康都城の東・西両側を流れる青溪と運瀆の二つの河道の位置と役割を十分に考慮している。その都城復原案は以下の如くである。都城南牆は現南京朝天宮の東、都城東牆は宋代府城東濠の西、都城北牆は、宋代府城北濠の北、都城西牆は運瀆の東にあった。宮城南牆は都城南牆の北二里、宮城東牆は都城東牆の西、宮城北牆は宋代府城北濠の南、宮城西牆は都城西牆の東に存した。なお、文献考証を踏まえ、六朝建康都城・宮城の復原図を作製している⁽²¹⁾。(図9)

外村が言う宋代府城とは、宋代の建康府城を指すが、それはまた楊吳・南唐の金陵城でもある。東濠・北濠とは、それぞれ玄津橋・逸仙橋下を流れる城濠と珠江路南側を流れるそれとに区別して言っている。作製された復原位置図を参照すると、建康都城・宮城はみ



図9 外村中復原図

な南北に長く東西が狭い長方形をしており、東西南北牆はみな直線で、都城南門宣陽門は現内橋北側に位置し、南唐宮城の南門と比較的接近している。

以上述べてきたところを総合すると、20世紀30年代以降、学者達の建康都城と宮城位置の推定には十種余りの見解があり、この十種余りの見解は基本的にはまた大きく四つに分類することができる。

第一の見解は、比較的早期に出されたもので、20世紀30年代朱傑の『金陵古迹図考』から始まり、半世紀以上影響を及ぼしてきた。この見解の共通点は、建康宮城の位置を現珠江路・進香河路・北京東路・太平北路の囲む範囲内、基本的には現東南大学成賢校区の位置にあったと考え、都城はその周りを囲い、

都城南門の宣陽門は現新街口・淮海路一帯に存したと推定した点である。

第二の見解は、日本の学者・秋山日出雄が提示したもので、その復原の考え方と把握している史料が他の学者とあまりに隔たっていることから、導かれた結論と復原された位置図もまた理に合わない点がある。

第三の見解は、比較的遅い時期に出されたもので、20世紀90年代初めの郭湖生「六朝建康」等の論文より始まる。この見解の共通点は、建康宮城は現大行宮民国総統府一帯に位置し、都城はその周りを囲い、都城南門の宣陽門が現淮海路南の羊皮巷・戸部街のラインに存したと推定した点である。

第四の見解は、日本の学者・外村中が提示した建康都城は南北に長い長方形で、その範囲は青溪と運瀆の間に制限されており、都城南門の宣陽門は現内橋の北側にあって、南唐宮城の南門に相当するというものである。この見解がひとたび提出されると、日本国内の学者達からも賛同を得⁽²²⁾、筆者もまた非常に啓発を受けた。

第一の見解と第三のその内容には、細かい点でいくらかの差異が存在するが基本的な観点は共通している。この二つの見解の内、第三の見解は、長い学術研究史上における第一の見解に対する反省である。ひとたび出されると、多方面の支持を得、優位な位置にあるようである。しかし、以上四つの復原意見が基づくものは、基本的には現存の歴史文献であり、それが正確であるか否かは、必ず考古発掘資料によって検証されなくてはならない。近年來の六朝都城遺跡の発掘は、各種復原意見を検証するための実物の資料を提供してくれており、また六朝建康都城と宮城の位

置を新たに復原するための新しい思考の筋道をも提供してくれている。

二 六朝建康城の最新考古成果

六朝宮城（台城）の位置を探り、都城配置等の重要な問題を明らかにするために、2001年5月より、南京市博物館は都市基本建設に協力して、計画的に数カ所の地点で緊急発掘をおこなった。2004年までに、すでに15カ所の地点を発掘し、発掘面積は累計1万平方メートル余りにのぼった。この一連の発掘の考古報告はなお発表されてはいない。公開された一部の資料はみな考古新発見の簡単な紹介ばかりであり、一部は発掘者の近刊の著作中に載っている⁽²³⁾。

発掘作業は前後二段階に分かれる。第一段階の重点は、東南大学・成賢街地区である。発掘地点には、(A)もとの老虎橋監獄、(B)成賢街43号、(C)東南大学キャンパス北部科技楼工事現場、(D)成賢街星漢大厦工事現場、(E)東南大学成園工事現場、(F)浮橋工事現場、(G)珠江路北側華能城市花園工事現場の計7カ所の工事現場を挙げることができる。発掘の結果、(G)地点を除いて、珍珠河西側の各工事現場、とくに東南大学キャンパス工事現場では、六朝時代の層は浅いところにあったが、建康宮城あるいは都城のものと言えるような如何なる重要な遺跡も発見されなかった。

第二段階の作業の重点は大行宮一帯に移った。発掘地点としては、(H)中国近代史博物館（民国総統府）工事現場、(I)人防広場工事現場、(J)日月大厦工事現場、(K)華夏証券大厦工事現場、(L)新浦新世紀広場工事現場、(M)南京図書館新館工事現場、(N)市体育局工事現場、(O)延齡巷工事現場の計8カ

所の工事現場がある。その中で、太平南路東側の(L)と(M)地点の発掘でついにこれまでの状況を打開し、建康城と関係する多くの遺跡を発見した。ここでは、本稿と密接に関わるものを選んで紹介すると以下の如くである。

1. 中山東路と太平南路との交差点東南角に位置する新浦新世紀広場工事現場(L地点)で、一本の北から東に25度傾いた南北に走る道路を発見した。この道路は北に向かい中山東路を越え、南京図書館新館工事現場(M地点)にまで延び、孫呉から南朝までの時期の路面が上下幾重にも重なり合い、各時期の道路の両側には磚積みの側溝が配されていた。孫呉時期の路面は比較的幅が狭く、その幅は15.4mであり、南朝の路面は最も広く、23.3mあった。東晋時期の路面は孫呉時期の路面を基礎にしつつ、西に約6m広がり、南朝の路面もまた東晋の路面を基礎にしつつ、東に10m近く拡張していた。その中であって東晋時期の路面には、整然と青磚が敷かれ、路面上には轍の跡ははっきりと残っていた。ある青磚の側面には東晋の紀年があり、路面の敷設が東晋成帝と康帝の時期におこなわれたことを証明している。これはまさに、蘇峻の乱後、琅邪の王氏王彬の主導下でおこなわれた大規模な都城建設時の遺物である。

2. 南京図書館新館の工事現場(M地点)で発見された道路は、新浦新世紀広場の工事現場(L地点)から東北方向に向かって延びた部分である。このほか、当該工事現場の西北側では、南朝時期の東西に向かう版築牆が部分的に見つかった。地層の関係から見て、この版築牆の使用時期は三つの段階に分けることができ、その中で早期段階

の版築牆の基礎となるくぼみの幅は12.4m、残っていた部分の深さは1.4mであった。各段階の版築牆の外側からは版築牆を覆っていた磚が発見されている。晚期段階の版築牆の残っていた部分の高さは0.7mであり、版築はきれいで、構造は緻密であった。また、土を突き固めた層は5-10cmの間であり、牆の基礎部分からはいくらかの木製の杙が見つかった。工事現場の東北側からは当該牆が北に向かって折れているのが発見されている。版築牆の南側からは孫呉と南朝時期の壕溝が見つかった。孫呉時期の壕溝の幅は9.75m、深さは2mであり、壕溝両岸には護岸のための木製の杙があった。また、南朝時期の壕溝の広さは5.6m、深さは1.1mであり、一部護岸のための磚牆が発見されている。東西に向かう壕溝と南北に走る道路とが交差する場所では木橋が一つ見つかり、その橋板はすでに存在していなかったが、橋脚は完全な形で残っていた。さらに、壕溝南岸からは東西に走る道路が発見され、孫呉から南朝時期に至るまでの道路が重なり合っていて、南北に走る道路と垂直であった。南北に走る道路の西側からは10カ所余りの磚構造の家屋遺址が見つかり、規模や構造は一様ではなかったが、牆址が向かう方向は道路のそれと同様であり、ひとしく北から東へ25度傾いていた。最大のものは8号家屋遺址であり、南北の幅は12.5m、東西の残っていた部分の長さは13.5mであって、柱穴の分布状況から見て、横幅は五間・奥行きは三間であり、北牆上には幅2.1mの門道が残っていた。周囲には回廊があり、廊道の外には磚を敷いた犬走りと排水溝が存した。排水溝は多く露

溝であり、磚積みは整然としており、いくつかの場所では道路の下方を通じさせ、磚で造ったアーチ型天井の地下水路としていた。このほか、5つの南朝井戸が発見された。井戸底には木板が敷かれ、井戸の内壁は特製の筒状の陶器を底から貼り付けて積み上げていく方法で造られており、どの筒状の陶器にもみな水を通す穴が4つあいていた。

2005年以後、南京市博物館は都市基本建設の機会を利用して、わずかな機会を活用し継続して建康城遺跡の発掘をおこなった。資料はまだ正式に公表されてはいないが、メディアの報道と筆者の視察とを踏まえて言うと、以下のいくつかの地点で重要な成果を得た。

- (1) 大行宮民国総統府西側の江蘇省警察博物館工事現場では、北から東に25度傾く磚で舗装された道路が発見され、それは、L地点とM地点のそれと南北につながっていた。
- (2) 大行宮民国総統府東南側の江蘇美術館新館工事現場では、北から東に25度傾く磚で舗装された道路が見つかった。
- (3) 利濟巷西側の長発ビル工事現場では、南北に向かう版築を磚で覆った城牆が部分的に発見された。この城牆は各時代に踏襲されたようで、それぞれの時代の幅は異なっている。最も広いものは晩期の城牆でその幅は24.5mに達する。城牆外側の城濠の幅は17.25mであった⁽²⁴⁾。
- (4) 游府西街小学校附近の工事現場では、東西に向かうきれいに舗装された濠溝遺跡が見つかった。
- (5) 民国総統府東側のもと漢府街長距離バスターミナルの工事現場では、北から東に25度傾く城牆と城濠の遺跡が発見された。

これらの最新の考古成果は、建康城の復原にとって間違いなく極めて貴重な資料であり、こうした資料が一日も早く公表されることを希望する。

それほど多いとも言えない公表された考古資料の中にあって、建康城の復原作業に最も意義を有するものは、L地点とM地点を貫く道路の走る方向であり、北から東に25度傾くこの数値である。道路の西側の家屋遺址もまたひとしく25度に傾いており、このごろ発見された江蘇美術館新館工事現場の磚で舗装された道路およびもと漢府街長距離バスターミナル工事現場で見つかった城牆や城濠遺跡もまた傾斜角度は前者と同様であった。これはL-M地点の道路の傾斜角度が単独のものであることを物語っており、六朝建康城の傾斜の特徴であることを証明するものである。

三 建康城の傾斜問題について

『太平寰宇記』巻九〇、「江南東道二・昇州」および『資治通鑑』胡三省注にひとしく引用する『金陵記』には、「梁都の時、城中二十万戸、西は石頭に至り、東は倪塘に至る、南は石子崗に至り、北は蔣山を過ぎる、東西南北各おの四十里。」とある⁽²⁵⁾。『金陵記』の言うところは、南朝蕭梁時期の状況ではあるが、前後あい続く六朝都城建康と見なせるし、規模の上で各時代に差異はあるが、全体的な方位についてはおそらく何の変化もないはずである。この中で注目に値するのは、都城概念上の四至である。東方を倪塘までとしているが、倪塘は記述によれば今の南京市東南25里にあり、それは現江寧区上坊鎮泥塘村附近にあたる。南方の石子崗は現雨花台を包摂した城南の東西に横たわる一連の小高い丘である。

西方の石頭城は、現水西門の北方一帯に位置している。蔣山はすなわち今日の紫金山である。もしこの四つの点を線で結んだならば、建康が傾いていること、そのうえ傾斜がかなり激しく、中軸線は西南の石子崗から東北の蔣山に向かって45度近く傾斜していることにも気がつく。当然、蔣山は非常に広大な山であり、多くの山峰と尾根により形作られており、石子崗は東西に数キロにわたって延々と続いているし、石頭城も一つの点ではない。だから、線をどこから結んでいくか、この問題は傾斜の角度の計算にとって非常に大きな影響をもつと言えよう。『金陵記』はただ我々にこうした大きな概念を伝えているだけなのである。大行宮の数カ所の工事現場で発見された道路は、その走る向きは北から東に25度傾いており、六朝建康城の傾斜の特徴を裏付けたのである。

建康が傾斜した都城である理由は、まず長江の流れの向きと密接な関係があるように思われる。長江は中流の九江から東北へ向かって流れ始め、蕪湖から南京までの区間でさらに北流に近くなる。南京西北の長江内にある八卦洲を過ぎると、長江は東流し始める。この現象はつとに秦漢時期にすでに認識されており、長江の東南方を「江東」と称したり、あるいは「江左」と言っているし、江東の対岸を「江西」と称したり、あるいは「江右」と言ったりしている。つまり、この南北に流れる大江が、建康城の方位に影響していると思わせるのである。ただし明初に南京の宮殿を修築した際、方向はすでに改められている。その次に、城東の青溪の流れの向きとも非常に大きな関係がある。青溪は現太平門附近から南京市内に流入し、西南方向に向かってや

わらかに曲がりくねって秦淮河に注いでいる。六朝建康は終始青溪を城東の天然の障壁とした。だから青溪の流れる方向も建康都城のそれに影響を及ぼしているのである。

清代と民国の南京の地図、とくに現在の南京地図からは、多くの傾斜した道路を見つけることができる。それらは規則的に西南―東北に走っている。これらの街路は必ずしも六朝建康城の某かの街路あるいは河道と対応する訳ではないが、その走る方向は六朝建康城の名残にちがいない。

四 建康城復原の新構想

六朝建康城の位置を確定する前に、まず三点ほど明確にしておかなくてはならないことがある。

第一は、建康城中軸線としての御道の南端（朱雀門・朱雀航）の具体的位置である。朱楔はこの地点を秦淮河の最も南に突き出たところ（今日の中華門内鎮淮橋）の東北にある長樂渡、すなわち現馬道街上の朱雀橋一帯と推定している。ただし多くの意見は、御道南端が現鎮淮橋の北側にあったと断定している。唐・道宣『集神州三宝感通録』巻上には、「東晋金陵の長干塔なる者、今、潤州江寧県故揚都朱雀門東南、古越城東の廢長干寺内に在り。」とある⁽²⁶⁾。長干寺は、孫呉の時代に初めて建てられ、阿育王寺とも称された。宋代に長干寺は再建され、後に天禧寺と改名される。また明代に再建された後は、大報恩寺と称された。太平天国の時に破壊され、遺跡は現中華門外長干橋東南の晨光機械工場内にある。長干寺塔は六朝建康の朱雀門東南にあったから、朱雀門の位置が現鎮淮橋にあったとする説は成り立つ。しかし、この一帯の秦淮

河の幅は六朝隋唐時期にあつては広くゆったりとしていて、河面上に架けられた朱雀橋（橋を建設する前は浮航）は「長さ九十歩、寛さ六丈」⁽²⁷⁾であり、現在の尺度に換算すると、長さは140m前後、幅は20m近くあったことになる。もしそうだとすれば、御道南端の朱雀門は、おそらく現鎮淮橋の北100mより先の地点（だいたい現中華路の馬道街入り口の東北）に存したと思われる。この地点を「甲地点」と名付けることにする。

第二点は、青溪の流れの向きである。六朝歴代の都城はみな城東の青溪を天然の防衛障壁としており、このことはすなわち文献中で言うところの「皆青溪を出でず」である。青溪は一本の自然の川であり、その源流は鍾山の第三峰の南斜面に発し、鍾山の西側の諸水と合流し、西南方向に向かってうねうねと湾曲して秦淮河に流入する。十里余り続いており、「九曲青溪」という言い方がある。古青溪は現在すでに埋没し、尋ねるべくもない。唐宋人の記載によれば、青溪はおおよそ現太平門附近より西南に流れ、現小営一带にあった竺橋附近に至る。然る後、湾曲してくねくねと延びて西南の方向に流れ、おおよそその流れは現毘廬寺・三条巷北端・常府街東端・復興巷・文思巷をへて、現淮清橋一帯で秦淮河に注ぐ。10世紀に楊吳と南唐国が都城を造営した際、青溪を南北まっすぐに金陵城の東の城壕とした。この城壕は現竺橋から南に流れ、逸仙橋・玄津橋をへて、建康路の南に至り、秦淮河に流入する。青溪のゆったりと湾曲している部分は南唐都城内に囲い込まれ、次第に流れは滞っていった。清代の江寧省城図では、この旧河道沿いにたくさんの池が残っており、これらはおそらく青溪およびそ

の支流の名残であろう。よって、建康都城はこのラインの西にあるはずである。

第三点は、運瀆の位置である。運瀆は孫吳時期に開鑿された人工の運河であり、南は秦淮河につながり、北は潮溝に接している。それは、宮中に物資を運送するための水路であつたが、現在はやはり埋没してしまっている。『建康実録』巻一は、「晋の永嘉中、王敦始めて建康と為し、州城を創立す。今の江寧県城の置く所其の西に在り、其の西に偏れば即ち呉時の治城、東側は運瀆、呉大帝の開く所にして、今の西州橋水是なり。」と記載している。『実録』の言うところの「州城」とは、すなわち東晋南朝時期の揚州刺史の治所「西州城」であり、治城は現朝天宮に位置し、江寧県城は許嵩が生活していた唐代中期の江寧県の治所を指している。よって、運瀆の位置の推定は西州城の位置と密接に関わっている。『宋書』巻三、「武帝紀下」は、劉裕が揚州刺史徐羨之のことを思い出し、西掖門を歩み出で、西明門を出、西州城に向かう記事を書いているが、西明門は建康都城の西門であることから、西州城が建康都城の西城牆の外にあつたこと、運瀆が建康都城と西州城の間に挟まれていたことを了解し得る。賀雲朝は、「今日の地理方位から推論すると、唐の江寧県城はおおよそ江蘇省行政学院一帯にあり、西州城はすなわち現張府園「護龍河」遺跡の西から豊富路にかけての一帯に存した。」と考えている⁽²⁸⁾が、この説は非常に正しい。西州城の位置が推定された以上、運瀆の位置は現明瓦廊・糖坊橋のラインにあるはずで、おそらく六朝建康都城はこの運瀆の東に存したであろう。

以上の三点は、六朝建康都城の範囲を推定

する際の前提である。大行宮工事現場における北から東に25度傾く六朝道路の発見もまた復原作業に新たな根拠を提供した。もしこの道路の走る向きと建康城の傾斜角度とが一致すると仮定するならば、鎮淮橋北の甲地点から始めて、北から東に25度傾けて建康都城中軸線たる御道を描くことができるはずである。結果、このラインは、東北方向に向け、現太平南路と馬府西街との接点（乙地点）・太平南路の文昌巷西入り口（丙地点）・民国総統府・小九華山三蔵塔（覆舟山の最高地点）まで延ばすことができるが、その際、喜ばしいことに、大行宮工事現場L地点とM地点で発見された六朝道路が、都合よく仮定した都城中軸線と重なり合うのである。もしこの路面が宮城の外にあるならば、それは明らかに御道である。もしそれが宮城の内にあれば、それは建康宮中の中軸線のはずである。朱雀門（甲地点）から都城南牆正門の宣陽門までが五里（約2200m）、宣陽門から宮城正門の大司馬門までが二里（約880m）とするならば、宣陽門は現太平南路と馬府西街とが接するところ（乙地点）にあり、大司馬門は現文昌巷西入り口（丙地点）附近に存在したはずである。游府西街小学校附近で発見された東西に向かう城濠は、文昌巷と基本的に同一線上にあり、この城濠は建康宮城南側の護城濠であったはずである（以上は、南京市区地図により推定したが、おそらくある程度の誤差があるであろう）。この二つの鍵となる地点がこれにより確定された。

推定した中軸線と青溪および運瀆との間の距離は決して長くはなく、いずれもわずかに600m余りあるだけである。もし建康城が御道の中軸線とし左右対称の構造になっていた

と想定し、それに九曲青溪の岸辺に多くの王公貴族の別荘が占有する面積を考慮に入れたならば、宣陽門から南牆東牆の接点までの距離は一里（約440m）と仮定するのが穏当であろう（南京市行政学院南門附近）。すなわち南牆の全長は二里（880m）である。北牆の長さも同様でなければならない。都城四至の全長は二十里一十九歩であり、南北二牆の四里を除けば、残りの長さは東西牆の合計のそれである。こうして構成された南北長方形の区域が都城の範囲でなければならない。西南角は基本的に中山路西側張府園附近、西北角は基本的に珍珠橋西側、東南角は白下路の南京市行政学院の東南、東北角は龍蟠中路東側の軍区駐屯地西門内にそれぞれ存したと思われる。当然、建康の水路の影響を受けるから、ある地点では不規則な形が出現していた可能性もまた完全には拭い去れない。ただこのように推定した都城の範囲が、北界は小九華山（覆舟山）下のやや南にあって、文献中の「城覆舟山の前に据る」、すなわち都城が覆舟山の南に位置したという記載と一致したことは注目に値しよう。

前文では、中軸線の傾斜角度と御道の里数に依拠して、建康宮城の正門大司馬門が現文昌巷西入り口附近にあり、宮城はその北に存したと推定した。宮城の東西両側に東宮・左右衛等の施設があったことを考慮に入れると、宮城の東西牆と都城の東西牆の間には必ず一定の距離があったはずである。元来、比較的幅の狭い都城にあって、四至の全長八里の宮城が、南・北牆それぞれ一里、東・西牆がそれぞれ三里であったと仮定すると、ちょうどぴったりとあてはまる。こうして構成される区域がおそらく宮城の範囲となるはずである。

その北界は、現珠江路南側水路（潮溝遺跡と推定される）の南に位置する太平橋の南のラインにあり、すでに発掘されたL地点とM地点および北に向かって民国総統府・梅園新村等の地はみな建康宮城の範囲の中に存する。

建康城に関する歴史文献は、みなひとしく二十里十九歩の建康都城を孫呉建業城の遺制であり、東晋以後はただその旧制に従っただけだと見なしている。しかしこうした考えは適切ではない。二十里十九歩の都城は孫呉時期には存在していなかったはずであり、東晋の成帝が建康城を再建した時の規模である。朱雀航から覆舟山の最高峰に至るこの都城の中軸線は、東晋の成帝が新たに建康城の整備を計画した時の規定における重要な設計思想であったはずである。東晋の元帝の時に、新たに都城を建設する計画が持ち上がったが、建国の始めであっただけに、ことをしっかりと慎重に進めねばならなかった。ただし王導が遙かに南郊の牛首山を指さして「天闕」と為したという伝説は、我々に当時六朝人が牛首山を真南と見なしていた痕跡を残してくれている。劉宋の大明三年(459年) 9月甲午に、「南郊壇を牛頭山に移し、以て陽位を正し」ており⁽²⁹⁾、国家が天を祀る南郊壇を牛首山に移して、真南の方向と符合させたのである。牛首山の二つの峰の間と覆舟山の最高峰とこの二つの点を結んでみると、この線と我々が前に推断した都城の中軸線とが基本的に重なり合い、建康城の南北を貫く「聖なるライン」であったことを了解し得るのである。

以上の考え方から復原した建康宮城と都城の位置図(図10)は、その他の復原図と差異がある。その原因を考えてみると、今までの人達が建康城を復原し図示する際に、みな宮

城と都城を正方形や正方形に近い形とイメージしてしまったり、あるいは、青溪や運瀆の位置とその作用を考慮に入れていなかったことに思い至る。その中で唯一の例外が、外村中1998年の復原図である。外村中の復原図では、宮城や都城も南北方向に延びる長方形の形をとっており、筆者の構想と復原図に非常に近いものとなっている。ただ全体の位置が筆者の復原図に比べ、南に100m余りずれ、少しばかり西に偏っているだけである。そのずれの原因は、外村中が都城南牆の長さを三里、宮城南牆のそれを二里強と仮定したためであり、この点で筆者との間に一定の差異が生じたのである。なお、外村中はまた六朝秦淮河の幅を軽視してしまっており、城西の運瀆の具体的位置についてもおそらく認識上またすべて同じとは言えない。ただこうした差異はあるけれども、大行宮工事現場で六朝道路の方角が発見される以前において、ただ文献史料だけで、このように正確な建康城図を復原し得たことは、実に卓見と言わざるを得ない。

以上の推論過程は、いささか煩雑ではあったが、我々にとって地下に埋もれている六朝都城を認識することは、やはり有益であるし、また我々のように長い間南京で生活し、南京の街巷を熟知している者から言えば、そう難しいことではない。以上の推測を通して、我々はおおよそ次のような知見を得ることができる。

第一、建康の宮城と都城はみな南北に長い長方形であった。この種の形状は、魏晋洛陽城にその起源を求めることができ、北魏洛陽城の子城にその影響を見ることができる。とくにそれは宮城北側の外に設置された広大な

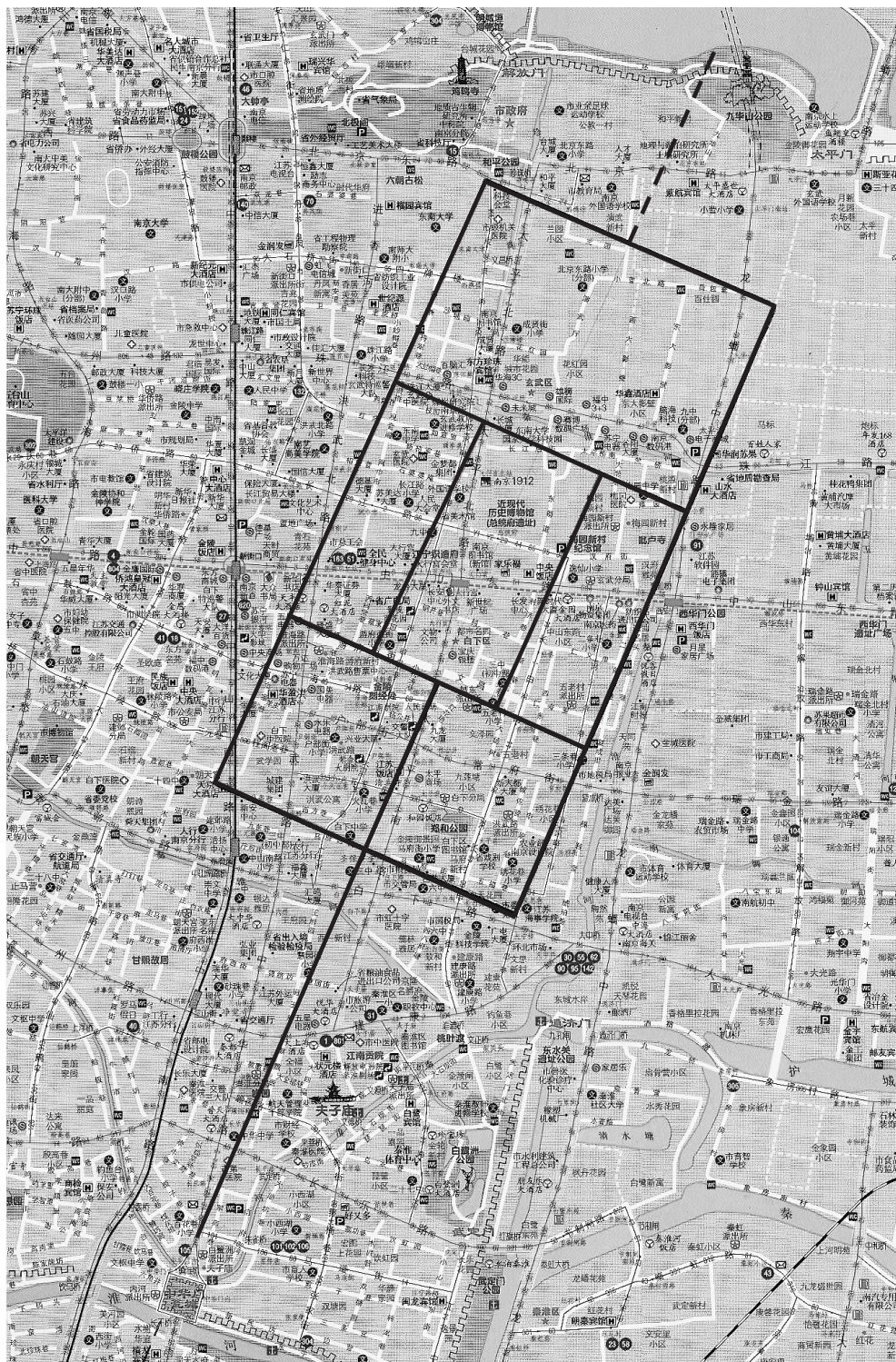


图10 筆者復原位置图

苑園（華林園）においてであり、それは曹魏鄴城の宮城西北に設立された銅爵園、北魏洛陽城の北に設置された華林園、隋唐長安城の宮城北に設けられた西内苑の造り方と驚くほど似通っている。これはまさに宮城北辺の防御を重要視する中国中世都城の共通性なのである。孫呉時期の建業城は、太初宮の東北に苑城を設けた。東晋の成帝は新たに都城の整備を計画した際、潮溝の南を宮殿区と設定するとともに、潮溝の北をまた開いて苑園とし、旧都洛陽をまねて華林園と称した⁽³⁰⁾。そしてこれを都城竹垣の範囲内に入れ、もともとわずかにあった住宅を撤去し、その中に皇室専用の邸宅・菜園を設けたが、とくに甚だしいのは聴訟堂等の建物であり、それは言うならば、皇帝が政務を処理する場所でもあった。よって、華林園の機能の性質から言うと、それは宮城の御苑であって、都城牆の範囲に組み込み、宮殿の重要構成部分とすることが、その情理にかなっていたのである。劉宋時期、さらに華林園の北、覆舟山南麓の東晋北郊壇等の施設を撤去して、苑園を拡充し、楽游苑と命名し、宮苑の範囲を玄武湖畔にまで到達させた。宮城南部の都城区域には、主に各種の政府機構・寺院や一部の大型住宅が集中した。この区域は北魏洛陽の銅駝街両側に相当する。また、主要な居民区と商業区は都城牆の外に集中していた。これらはみな中古時期の都城の共通した特徴と言える。

第二、大行宮工事現場で発見された六朝道路は、宮城中に位置する南北に走る主要道路であり、この道路は宮城南門大司馬門外の御道と接続していたはずである。報道によれば、大行宮工事現場北端の東西両側で道路と垂直する版築牆の遺跡が見つかり、版築牆の南側

には壕溝や木製の橋脚があり、東端の版築牆が北に延びる形跡も見つかっている。版築牆の傾斜角度、門道の遺跡があるかどうか等々、まだなおはっきりしていないが、以上の推論を踏まえれば、この版築牆はおそらく宮城内部の隔壁もしくは宮殿建築の土台であったと考えられる。

第三、基本的に東西に流れる潮溝は、『建康実録』等の文献中ではひとしく建康の「北塹」とされている。筆者の復原図からは、今日、珠江路の南を沿って東西に流れる水路が間違いなく潮溝であり、東端が現竺橋附近で青溪と接し、西は運瀆と相通じていて、北に向かって太平北路西側の珍珠河（孫呉時期に開鑿された城北渠）を通して、玄武湖水と通じていた様子を看取し得る。ここで強調しておきたいのは、潮溝はおそらく建康都城全体を含めたうえでの北界であるはずはなく、潮溝の北にはまだ広大な御苑があり、都城二十里十九歩は当然苑園を内に包括していたことである⁽³¹⁾。南朝蕭梁時代、梁の武帝がしばしば捨身した著名な仏寺の同泰寺は、おそらく潮溝北側の苑園の中にあったはずである。『建康実録』巻十七に引く『輿地志』は、同泰寺について、「北掖門外の路西に在り、寺南のかた台と隔たり、広莫門内の路西に抵たる。」と言っている。北掖門は建康宮の東北門であり、広莫門は建康都城の北門である。だから、同泰寺を内に包括した苑園が二十里十九歩の都城牆の中に包含されることについては、まず間違いないのである。2001年11月から2002年1月まで、考古従事者が玄武区政府西側の小貴山地区で大規模な発掘をおこなった。その結果、地表から2mの深さのところで、大量の遺物が出土した。青瓷盞・盤・碗・盤口壺・

鉢等の日常生活用品のほか、大量の筒瓦・板瓦・瓦当等の建築材料が見つかり、その中でも蓮花紋の瓦当はとりわけ精巧で美しいものであった。同時にまた磚積みの正方形の建築物、磚で造られた井戸の内壁、道路等の遺跡も発見された⁽³²⁾。この遺跡は、或いは皇帝家の道場たる同泰寺と密接な関係があるかもしれない。さらに、この地点で発見された建築物の牆壁や道路はひとしく西南から東北に走っており、建康城の全体の方角と完全に一致したことは注意に値しよう。

以上の検討は、少ない考古資料に基づきおこなっただけで、都城や宮城の位置の推定も初歩的なものであり、復原位置図の作製もより精密かつ正確な地図でおこなわなかった。ゆえに今回の作業をおこなった目的は、今後の六朝建康城の復原研究のために、新たな構想を提供しておくことにこそある。最近出版された『南京城牆志』の中で、建康城の考古作業を主宰する王志高も「南朝建康都城及台城位置示意図」を提示している⁽³³⁾。当該図と筆者の位置図との間にはいくらかの差異があるが、これは主に王が二十里十九歩の建康都城をすべて潮溝の南に入れ、覆舟山下の苑圍を都城の範囲に入れていないことを表している。こうした結果をもたらした原因は、我々の間に建康城中軸線の傾斜角度、青溪下流の流れの向き、運瀆の位置そして近頃発見された鄧府巷水路遺跡の性格等の問題について異なった見方をしていることにありと推測される。認識の差異を埋めるには、復原研究をより一層精緻なものにしていくとともに、今後、より多くの考古資料が公表されるのを待たなくてはならない。

五 中国都城發展史上の建康城

六朝建康城の中国都城發展史上の意義について論及する際、必ず蔣少游個人に話が及ぶ。蔣少游は、北魏時代の樂安博昌（現山東博興）の人であり、聡明鋭敏で、絵や彫刻に長け、土木建築方面に天賦の才があった。若い頃に「平斉戸」として平城に徙民されたが、後に孝文帝のおめがねにかなない、「平城に於いて、將に太廟・太極殿を営まんとし、少游を遣りて伝に乗せ洛に詣り、魏晉の基址を量準せしめ」られている⁽³⁴⁾。南斉永明九年（北魏太和十五年、491年）、蔣少游は、魏使李道固の副使として南斉に遣わされ、建康の宮掖を模写して帰還した。そのため、多くの学者は、北魏洛陽城の宮殿や太廟の配置は建康の宮城を模倣し、さらに北方都市の宮城配置の特徴と結びついて建設されたと考えている⁽³⁵⁾。しかし、北魏洛陽城の造営には、蔣少游の派遣により建康城から受けた影響も多少あったであろうが、北魏洛陽城の宮殿や官庁が存する内城部分については、その基本的な構造は旧魏晉洛陽城の姿を残しており、建康城との間の相互関係は不明瞭である。実際のところ、建康城と北魏洛陽城の内城との間の相似性は、どちらがどちらを模倣したというような問題などではなく、中国中世の都城が備えもっている共通性なのである。

東晉の建康城は北から南に向かって苑圍・宮城・都城・工商業居民地区という配置となっているが、この配置の淵源はどこにあるのだろうか。これは、非常に意義のある学術上の問題である。現在までの建康城研究にあって、基本的に意見の一致を見ている観点は、例えば、建康城が魏晉都城の旧制を継承し、華夏の流れを伝承して、中華の正統を代表してお

り、同時代および隋唐都城の建設にプラスの影響を与えたというものである。またその他、この全体的な配置が、我が国における都城配置に特有な風格の先駆けとなり、後世の都城プランに多大な影響を及ぼすことになったというものもある。一つの都城を議論する際、通常その中国古代都城制度史上における継承と発展の問題を考える。中国歴代都城の発展史上の一環と見なせば、前代の伝統を継承していることは言うまでもない。ただもし建康城を含めた魏晋南北朝隋唐都城を当時の大きな歴史環境の中において考察してみると、また一方で、伝統の外の、遙か遠く草原の帝国よりもたらされた文化要素のあることに気がつく。

戦国中期以後に成立した『考工記』は、中国先秦時期の手工業の技術的發展を記録しまとめた文献である。その中で王城の建設問題について、「匠人国を営む、方は九里、旁は三門、国中は九經九緯、經涂は九軌、左は祖右は社、面は朝後は市たり。」と言っている。すなわち、天子の都は、周囲九里、一辺ごとに三門あり、門ごとに三つの門道がある。城中には南北・東西に走る道路がそれぞれ九本造られ、左側には宗廟が設けられ、右側には社稷壇が置かれた。朝廷は前方にあり、市場は後方に存する、と。すべての都城がみな広々とした平地に新たに設計されることはあり得ないため、いくらかなりか地理環境の影響を受ける可能性がある。だから『考工記』の言う構造は、おそらく現実として、いくらかの理想をも含めた都城の建設技術の総括であったと考えられる。事実、文献に基づいて復原した戦国時代の魯国都城・燕国都城・宋国都城等はみな、かなりの部分で『考工記』の内

容と符合している⁽³⁶⁾。また、文献の記述と考古資料に依拠して復原した西漢都城長安図からも、都城は渭河の流れの向きの影響を受けて構造規則の方形とはなっていないが、城内の大部分の空間にはそれぞれ異なった名称の宮殿が建ち並んでおり、市場は宮殿区の後方にあつて、「旁三門」「左祖右社、面朝後市」といった基本的要素が『考工記』となお一致している様子を見て取れる。このほか、西漢長安城の明らかな特徴の一つに、「多宮制」がある。すなわち、宮殿は都城の各場所に配置され、後世のように宮城の中に集中してはいない。

最も早くに宮殿を一カ所に集中させ、宮城を建設し、その宮城を都城の北辺に、官庁と居民区を都城の南辺に配置した都城は、曹魏の鄴城である。鄴城は現河北省臨漳県に位置し、曹操の時に造営が始まり、曹氏集団の政治の中心地となった。曹丕が魏王朝を創業した後も、継続して曹魏における政治の中心としての役割を果たしている。実測して復原した鄴城の平面図から見ると、鄴城は厳密な設計のもと建設された都市であったと思われる。鄴城の東西の長さは七里、南北は五里であり、平面は長方形となっている。建春門と金明門の間の大通りは、鄴城唯一の東西に走るそれであり、鄴城を南北二つの区域に分けている。北部の中央は、宮殿区であり、東部は貴戚が居住する戚里、西部は苑城銅爵園である。園内には、武庫・馬屋・倉庫が置かれ、城の西北部の金虎・銅雀・冰井三台と相連なって、游苑区を形成するとともに、都城の防御区をも構成した。南部は東から西に向かって、長寿里・吉陽里・永平里・思忠里の四大居住区に分かれている。中央には南北に走る大通り

があって、宮城門から中陽門へ通じており、大通りの両側には各級の官庁が置かれている。外郭城内の整然とした里坊は、北方遊牧民族の部落遺制の影響を受けている。

曹魏のもう一つの都城洛陽は、後に西晋の時にも利用され、魏晋洛陽城と総称されている。魏晋洛陽城が踏襲したのは東漢の洛陽都城であり、その都城の全体的な構造はすぐには変更し難かったが、東漢時期の南宮は魏晋時期には消えてなくなり、宮殿の建築物はすべて東漢時期の北宮の中に集中することになる。そして、宮城と都城北牆の間には広大な苑囿（芳林園、後に齊王曹芳の諱を避け、華林園と改称される）が設けられるとともに、城の西北角には金墉城が増築され、北方の防備が増強される。都城の外にきちんとした外郭城があったかどうかについては、今のところ考古学上の証拠はまだ見つかっていない。東晋の成帝の時に、建設を計画された東晋建康城は、その配置と構造から見て、曹魏鄴城と革新後の魏晋洛陽城の影響を非常に受けている。宮掖は宮城の中に集中し、宮城正門の南に位置する御道の両側には政府官庁が集中しており、宮城と都城北牆の間には広大な苑囿が置かれ、都城周囲には56カ所の籬門で囲みこれを觀念上の外郭城とした⁽³⁷⁾。このような都城の構造は、後に北魏洛陽都城を拡大改造した時に、発展を遂げることになる。宮城は都城の北部中央にあり、宮城正門から都城正門までの間の銅駝街両側には大小の官庁と仏寺が置かれ、宮城と都城の間は東西に走る横街によって仕切られる。都城の外は、外郭城によって都城の南と東西両側に位置する工商業区と居民区を囲むとともに、区画して整然とした里坊を造った。6・7世紀の隋唐都

城長安のプラン設計の際、さらに官庁を宮城南側に集中させ、城牆を修築して皇城を形成する。また工商業区、居民区と仏寺を皇城の南に集中させ、外郭城を形成した。隋唐長安城に至り、曹魏鄴城以来の都城の構造が完成するのである。

上述した曹魏から隋唐に至る都城の発展過程からは、都城は通常方形ないしは長方形の形をし、辺ごとに三つの城門、そして主要な城門にはみな三つの門道があり、左右にはそれぞれ宗廟と社稷が配されていて、こうした要素は『考工記』の内容と基本的に一致するものではあったが、苑囿・宮城・都城（主に御道両側の官庁区）・工商業および居民区（外郭城）は北から南に走る御道を軸に左右対称に置かれており、こうした構造が斬新な形式であったことに気がつく。それでは、なぜ漢魏の際に、都城の構造にこのような大きな変化が生じたのであろうか？この問題は、中国の歴史文化の発展や変遷と密接に関わっている。

先秦時代は、中国固有の伝統文化が形成され発展していく段階であるが、『考工記』中の「匠人営国」についての技術総括は、この固有文化が都城構造の面に反映したものであると言える。秦漢の統一国家が形成されて後、中国文化は外に向かって広がり、周辺地区の文化の発展を強烈に促進させる作用を起こした。中国文化からの刺激のもと、周辺の多くの民族が覚醒し始める。魏晋時代になり、中国文化の影響を受け徐々に覚醒してきた周辺民族は、中国の国力が衰退した際、まるでゲルマン人がローマに侵攻したように、逆に中国内地に侵入し、それぞれ自身の政権を打ち立てるようになり、中国の歴史は魏晋南北朝の段階に突入していく。そして隋唐帝国は、この

歴史の流れの延長線上に位置しているのである。大いなる歴史の発展という視点から見れば、この一連の時代は、中国の「中世」である。中世の歴史文化は、中国固有の伝統文化と、周辺の文化、とりわけ北方草原の遊牧文化および西域のインド文化が相互に融合して生み出された文化と言える。隋唐以後、匈奴・鮮卑・羯・氐・羌はみなその姿を消し、いろいろな文化要素と融合した中国文化は、斬新な姿となって隋唐時代に現れ、中国中世文化の絶頂期をむかえることになるのである。

構造が斬新であった曹魏鄴城は、このような大きな背景のもと中原の大地に出現したのである。両漢以来の匈奴との関係、東漢末年の曹操と烏丸との戦争、多くの遊牧民族の内地への定住、等々により、草原の居住形式が中原に持ち込まれた。匈奴に代表される草原の屈強な民族の部落形態・政権の性格・生活形式が、彼らの聚落の形式に影響を及ぼしたのである。匈奴の制度によれば、大単于は北の中央にあり、南に向かって左右両翼に分かれ、左賢王・左谷蠡王を第一の左翼として東に置いて上位とし、右賢王・右谷蠡王を第一の右翼として西に配して次位とした。匈奴大単于の王庭における配置の中で、大単于のテントが最も大きく、中央北にある。左翼諸王のテントは東に配され、身分等の上下によって北から南に向かって排列される。右翼諸王のテントは西に置かれ、またこちらも身分等の上下により北から南に排列された。匈奴の後の草原大帝国が農耕地域に進入する前も、おそらくこのようであったであろう。それはたとえ後期に至っても変わらず、満洲族の清朝が入関する前に造営した瀋陽故宮にもまた草原帝国の痕跡が色濃く残されている。瀋陽

故宮の西側は、ヌルハチやホンタイジ時代の居所であり、東側の十王亭は、満洲の部族連盟の議政場所である。連盟の首領ヌルハチの龍庭は中央北にあり、南に向かって東西両側に序に順い各旗の亭が造られた。曹魏鄴城と洛陽城・東晋建康城・北魏洛陽城・隋唐長安城のプラン設計には、草原帝国の単于王庭の配置と複雑で入りくんだ関係が存していたのである。

東晋建康城を含めた魏晋南北朝隋唐の都城は、ややもすれば中国伝統都城のモデルと見なされてきたが、上述の内容から看取し得るように、実際は匈奴や鮮卑等の草原文化の影響を受けつつ発展し、中国中世都城特有の構造を形成したのであった（後世、『考工記』の理念に忠実にプラン設計された都城は、実は元朝の大都、後の明清北京である）。中世都城発展の絶頂にあたる隋唐長安城は、中国の社会と文化が東漢末年からの分裂期とその再生される過程をへたうえに生み出された都城であったのである。そして江南の地にあった東晋建康城は、たとえ中原から遠く離れていても、人々の移動により、また歴史の発展の流れから外れることなく、中世都城発展史上の重要な一部分となっていたのである。

注

- (1)本稿は、『蔣贊初先生八秩華誕頌寿紀年論文集』編集委員会編『蔣贊初先生八秩華誕頌寿紀年論文集』（北京、学苑出版社2009年9月、第276-292頁）所収の拙稿を基礎としており、今回の翻訳発表の機会に、多少の最新資料と旧稿発表以後に得た知見を増補したものである。
- (2)張学鋒「六朝建康城的発掘与復原新思路」（『南京曉莊学院学报』2006年第2期）。
- (3)岡崎文夫「六代帝邑考略」、同氏『南北朝に於

- ける社会経済制度』所収、弘文堂1935年版。
- (4)朱僕『金陵古迹図考』、商務印書館1936年版、中華書局2006年再版。
- (5)朱僕『金陵古迹図考』、中華書局2006年再版、第100頁。
- (6)廬海鳴『六朝都城』、南京出版社2002年版、第84頁、参照。
- (7)楊國慶「明南京城牆設計思想探微」(『東南文化』1999年第3期)、参照。
- (8)蔣贊初『南京史話』、江蘇人民出版社1980年版、南京出版社1995年再版。
- (9)廬海鳴『六朝都城』、南京出版社2002年版、第82頁、参照。
- (10)羅宗真『六朝考古』、南京大学出版社1994年版。
- (11)郭黎安の六朝建康城の研究には、「試論六朝時期的建業」(『中国古都研究』第1輯、浙江人民出版社1985年版)、「魏晉南北朝都城形制試探」(『中国古都研究』第2輯、浙江人民出版社1986年版)、「六朝建康与軍事重鎮の分布」(『中国史研究』1999年第4期)等がある。後に集大成し、『六朝建康』香港天馬圖書有限公司2002年版を著した。
- (12)秋山日出雄「南朝都城『建康』の復原序説」(『橿原考古学研究所論集』第7、1984年)、「南朝の古都『建康』」(岸俊男編『中国江南の都城遺跡』同朋社、1985年)。
- (13)中村圭爾「建康の『都城』について」(唐代史研究会報告第Ⅵ集『中国都市の歴史的研究』刀水書房、1988年)。後に、同氏『六朝江南地域史研究』汲古書院、2006年に再録。
- (14)郭湖生「六朝建康」(『建築師』第54期、1993年)。「台城考」(『中華古都』、空間出版社、1997年版)。「台城辯」(『文物』1999年第5期)。
- (15)例えば、曾布川寛・岡田健主編『世界美術大全集 東洋巻3 三国南北朝』(小学館、2000年)、傅熹年主編『中国古代建築史』第二巻「三国・兩晋・南北朝・隋唐・五代建築」(中国建築工業出版社2001年版)、等。
- (16)馬伯倫・劉曉梵等編『南京建置志』、海天出版社1994年版。
- (17)李蔚然「六朝建康發展概述」(『東南文化』1998年増刊2)。
- (18)賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』、文物出版社2005年版。
- (19)民国総統府東側のもと漢府街長距離バスターミナルの工事現場の城牆・城濠の遺跡は、2008年の春と夏に発掘された。これらは、建康宮の東牆遺跡と推測される。南京市文物部門は、現在ここに「六朝建康博物館」を建設する準備をしている。江蘇美術館新館建設工事現場の磚で舗装された道路は2007年に発掘された。二回の発掘で発見された資料は現在に至るまでなお公表されていない。
- (20)廬海鳴『六朝都城』、南京出版社2002年版。
- (21)外村中「六朝建康都城宮城攷」(『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所、1998年)。
- (22)例えば、愛宕元・富谷至主編『中国の歴史』上冊【古代—中世】、昭和堂2005年。辻正博『魏晉南北朝時代の聴訟と録囚』(『法政史研究』55号、2005年)。
- (23)王志高・賈維勇「六朝古都 掀起蓋頭」(『中国文物報』2004年3月10日第1版)、王志高「南京大行宮地区六朝建康都城考古」(『2003年中国重要考古發現』文物出版社2004年版)、羅宗真・王志高『六朝文物』、南京出版社2004年版。王志高・賈維勇「南京発現的孫吳釉下彩繪瓷器及相關問題」(『文物』2005年第5期)。
- (24)楊國慶・王志高著『南京城牆志』、鳳凰出版社2008年版、第55頁。
- (25)(宋)樂史撰・王文楚等点校『太平寰宇記』巻九〇、「江南東道二・昇州」、中華書局2007年版、第1774頁。(宋)司馬光等撰『資治通鑑』巻一六二、梁紀武帝太清三年胡三省注引。
- (26)(唐)道宣撰『集神州三宝感通録』、『大正新修大藏經』第五二巻所収。
- (27)(唐)許嵩撰・張忱石点校『建康実録』巻七、中華書局1986年版。
- (28)賀雲翱「六朝『西州城』史迹考」(『南京史志』

1999年第3期)。また、同氏『六朝瓦当与六朝都城』、文物出版社2005年版。

㉙『南史』卷二、「宋本紀・孝武帝」、中華書局1975年版。

㉚『景定建康志』卷二、「城闕志三・園苑」に、「古華林園在台城内、本吳宮苑也。」とある。廬海鳴『六朝都城』は、この記事により華林園が宮城の中にあったと推定している（第212頁）。ただ『景定建康志』の言う「台城」の概念は、今討議している「宮城」とはまったく一致しない。それは広く宮苑を指しているように思われる。華林園の機能と性質から言えば、それは皇帝家の専有物であろうから、そういう意味で言えば、華林園を「台城」の構成部分と見なしてもそれはまた情理にはなっている。

㉛潮溝に関しては、多くの意見と復原位置図においては、みなこれを建康都城北界としているが、そのよりどころとなる基本史料は、『建康実録』卷二、吳大帝赤烏四年条に、「冬十一月、詔鑿東渠、名青溪、通城北塹潮溝。」と見え、許嵩自注に、「潮溝亦帝所開、以引江潮。其旧跡在天宝寺後、長寿寺前。東発青溪、西行經都古承明・広莫・大夏等三門、西極都城牆、対今歸善寺西南角、南出經閭闔・西明等二門、接運瀆、在西州之東南流入秦淮。……其溝東頭、今已湮塞、才有处所。」とあるところから来ている。潮溝は孫吳時期に開鑿されたが、当時すでに都城の範囲が二十里十九歩であったかどうかは、非常に疑わしい。筆者は基本的に否定の立場をとって、二十里十九歩の都城範囲は、東晋成帝以後の概念であると考えている。『実録』の言う「城北塹」の城とは、おそらく当時の苑城を指しており、晋成帝の時、建康宮を修築したがために、「城北塹」と称された潮溝が、建康宮の「北塹」となったのである。許嵩は、注釈の中でまた潮溝の流れが「都古承明・広莫・大夏等三門」をへたと言う。広莫・大夏二門は確かに都城北牆の門ではあるが、承明門は宮城北牆のそれであり、そのうえ広莫門ももとは宮

城の北門であり、後に「広莫」の名が都城北門に用いられるようになったのである。だから、許嵩の注釈もまったく疑うことなく利用してはならないようなのである。また例えば、『実録』卷七、注に引く『輿地志』は、都城「正北面用宮城、無別門」と言っており、これは建康都城と宮城とが北牆を共用していたことを意味しているようであり、一部の学者もこれに依拠して建康城を復原し図示している。ただし、事實は、南朝以降、都城北牆に陸統と広莫門・大夏門・延熹門・玄武門が開かれているのであって、これらの史料を運用する際は慎重にならなくてはならない。

㉜廬海鳴『六朝都城』第76頁、参照。

㉝楊国慶・王志高『南京城牆志』、鳳凰出版社2008年、第35頁。

㉞『魏書』卷九一、「術芸伝・蔣少游」、中華書局1974年版。

㉟楊寛『中国古代都城制度史研究』、上海古籍出版社1993年版、第164頁、参照。

㊱曲英傑『先秦都城復原研究』、黒龍江人民出版社1991年版、参照。

㊲建康の外郭城に関しては、『太平御覽』卷一九七に引く南朝『宮苑記』に、「建康籬門、旧南北兩岸籬門五十六所、蓋京邑之郊門也。如長安東都門、亦周之郊門。江左初立、并用籬為之、故曰籬門。南籬門在國門西、三橋籬門在今光宅寺側、東籬門本名肇建籬門、在古肇建市之東、北籬門〔在〕今覆舟山東頭玄武湖東南角、今見有亭、名籬門亭、西籬門在石頭城東、護軍府在西籬門外路北、白楊籬門外有石井籬門。」と見え、建康に外郭が存在したことを確認し得る。

訳者附記

張学鋒先生は、南京大学歴史系の教授である。考古学専修を受けもたれており、六朝文物はもちろんのこと、歴史学の分野にも造詣が深い先生である。著書には、『東晋文化史』

(傅江先生との共著、南京出版社、2005)、『中国墓葬史』(編著、広陵書社、2009)などがある。日本語も堪能で、日本の研究にも精通されていることは、周知のところであろう。

なお、私事で恐縮ではあるが、2004年9月から2006年7月にかけて南京大学歴史系に高級進修生として留学した際、張先生には大

変お世話になった。本論文の訳出を快諾してくださった先生に改めて御礼申し上げるとともに、この翻訳がいくらかなりとも留学時の恩返しになれば幸いである。

文末にあたり、本論文の訳出を勧めてくださり、翻訳にあたって多くのご助言をくださった新宮学先生に感謝の意を申し述べたい。